

P3-57-7 一般産科診療における Nuchal Translucency (NT) 計測の現状と課題

胎児クリニック東京

宋 美玄, 中村 靖, 紀平 力, 田村智英子

【目的】一般産科診療における妊娠初期胎児超音波検査の現状を把握し、問題点を明らかにする。【方法】2014年9月から2015年8月までの1年間で、他院でNT肥厚・胎児後頸部浮腫を指摘された後に当院を受診した71例中、初診時に頭臀長85mm以上であった3例および子宮内胎児死亡であった2例を除いた66例を対象とし、その検査結果および妊娠転帰について、後方視的に調査を行った。なお、当院における検査はすべて、十分な時間をかけた遺伝カウンセリングの過程を経て、インフォームドコンセントを取得したのちに行っている。【成績】異常所見を指摘された際には、2例をのぞく全例が経膈超音波で観察されていた。66例中、胎児頭臀長と比較して95percentileを上回るNT計測値であったものが43例であり、そのうち他の所見も伴っていたもの(A群)が18例、他の所見がないもの(B群)が25例であった。NT肥厚と考えられなかったもの(C群)が22例(33%)存在した。A群では染色体検査がおこなわれた11例中10例に染色体異常が認められた。B群では絨毛採取または羊水穿刺を希望した3例(全例染色体異常なし)を除いてすべて超音波検査でのフォローとなった。C群ではNT以外の超音波異常所見を認めた2例で染色体異常が判明したが、他は経過観察となっており、これまでに分娩したものはすべて正常新生児であった。【結論】NT計測について検査目的を明瞭にしないまま、観察が漫然と行われている現状が浮き彫りになった。妊娠初期の胎児超音波検査についての普及・教育・トレーニングの必要性が痛感された。

12
一般演題
(日)**P3-57-8 NT \geq 3.5mmであった胎児の予後についての検討**

宮城県立こども病院

原田 文, 室本 仁, 室月 淳

【目的】CRLが45-85mm(妊娠11週2日から妊娠14週1日)の胎児におけるNTの肥厚と胎児の予後の相関およびそれを指摘された両親の診断的検査に対する意識について検討した。【方法】2011年10月から2014年9月までの3年間で、妊娠11週2日から14週1日までの時期に当院外来を受診し、3.5mm以上のNTの増大あるいは胎児水腫を認めかつその転帰が明らかになっている25例を対象とした。妊娠転帰および胎児染色体異常、先天性心疾患、遺伝疾患といった原因疾患の有無、妊婦の染色体検査への意識の動向について後方視的に解析した。【成績】25例の妊娠転帰は、子宮内胎児死亡10例、人工妊娠中絶4例(21トリソミー3例、ターナー症候群1例)、生児として出生11例であった。羊水および死産後の絨毛検体から胎児染色体の診断的検査が行われたものは16例あり、正常9例、21トリソミー5例、18トリソミー1例、ターナー症候群1例であり、胎児染色体が正常であった児には、中枢神経系の異常(脳梁欠損および水頭症)、先天性心疾患(両大動脈右室起始症、下大静脈欠損症、多脾症候群)、Cornelia de Lange症候群がそれぞれ1例ずつ見られた。また、胎児染色体検査を希望せず妊娠の継続したのは3例、NIPTを選択し診断的検査を行わなかったのは2例、その他は羊水検査を希望した、あるいは予定したが施行できなかった症例であった。【結論】3.5mm以上のNTの増大を認める場合は、子宮内胎児死亡に至る可能性も高い一方で、胎児が正常である可能性もありその転帰は様々である。胎児染色体異常を認める確率が高いため診断的検査の重要性も大きく、胎児異常を指摘された場合には診断的検査を希望する妊婦の割合は多い傾向がある。

P3-57-9 妊娠初期の結合双胎の補助的診断に3D超音波画像法が有用であった1例

愛仁会千船病院

村越 誉, 高橋良輔, 成田 萌, 宮地真帆, 水野祐紀子, 大木規義, 安田立子, 稲垣美恵子, 岡田十三, 吉田茂樹, 本山 寛

【緒言】結合双胎は、約100,000分娩に1例発症する双胎の形態異常である。近年は超音波断層装置の進歩に伴い診断が早期になされるようになった。今回我々は、妊娠11週で結合双胎を診断し、3D超音波画像法が補助的診断に有用であった1例を経験したので報告する。【症例】22歳、1経妊1経産、自然妊娠。既往歴に特記事項なく、喫煙歴、妊娠中の飲酒、薬物内服、放射線被曝、ウイルス感染などを疑う症状はなかった。最終月経から妊娠7週の時点で前医を受診し妊娠の診断を受けた。妊娠11週の定期診察で胎児形態異常の指摘を受け、当院に紹介受診した。2次元超音波画像法では、頭臀長は42mmで妊娠11週2日相当であり、頭部は2つで、胸腹部が癒合し、上肢は4本、臀部から下肢は分離していた。癒合した胸腹部では心臓、肝臓を共有していた。両児は頸部を中心に著明な皮下浮腫を呈していた。また、3D超音波画像法では両児が抱き合うように結合している像が確認された。以上から結合双胎の中でも胸結合体(Thoracopagus)と診断した。妊娠中や出生後の予後を説明したところ妊婦と家族の意向により、受診翌日に人工妊娠中絶を施行した。【考察】超音波断層装置の進歩に伴い、結合双胎のみならず多くの胎児形態異常の診断が早期に可能となった。自験例においても2次元超音波画像法のみで、妊娠11週の結合双胎の胸結合体を診断することが可能であった。結合双胎の診断時に3D超音波画像法を併用することは、妊婦や家族へ両児の立体構造や具体的な病態の説明を行う際に有効であり、妊婦や家族の正確な理解と早い時期での選択肢が得られることに寄与する可能性が高いと考えられた。